

十人の男

代務牧師 齋藤 篤

聖書 ルカによる福音書17章11~19節

¹¹ イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。¹² ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、¹³ 声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。¹⁴ イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。¹⁵ その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。¹⁶ そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。¹⁷ そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。¹⁸ この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」¹⁹ それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」（13節）

十人の男は、イエスの姿を見るやいなや、遠くのほうから大声でこのように叫びました。彼らは、イエスに近寄ることができませんでした。なぜならば、近づいてはいけないことになっていたからです。彼らは、自分から好んでそうしたのではありませんでした。社会から隔離され、避けられていた存在だったのです。

この「十人の男」について、聖書には「重い皮膚病を患っている」と、彼らのことを説明しています。昔は聖書に「らい病」と書かれていましたが、世間ではらい病という言葉すら「ハンセン氏病」という名前に取って代わっていましたから、もはやらい病という言葉を用いず、「重い皮膚病」という言葉に変更されました。

しかし、旧約聖書が書かれた原語であるヘブライ語では「ツァアラト」という言葉の意味は、なにも特定の皮膚病を指す言葉ではなく、数種類の症状をもよおす皮膚疾患の総称であることから、日本聖書協会が刊行されている最新の聖書である『聖書協会共同訳』では、モーセ律法で規定されている皮膚疾患という意味から「規定の病」と訳されて、今日にいたっています。

医療も今ほど進化していない世の中で、病にかかった人を物理的に隔離するということは、感染予防をするうえで、今以上に大切な行動でした。新型コロナウイルスが流行した現在ですら、一定期間隔離することで、感染者もそうでない人も安全が守られるわけですから、当時の世界ならばなおのことと言えるでしょう。それは、モーセを通して神が与えられた律法の目的が、まさに、人間の命と尊厳を守るためであったということにありました。

しかし、モーセ律法の本来の意味、つまり、神が人間を愛されて、ご自分が与えた命と尊厳を守るために与えられた律法の言葉は、いつしか本来の意味が忘れ去られてしまって、「社会から隔離する」ということだけが残されてしまいました。好んで皮膚病になったわけでもないのに、社会から冷たい視線を向けられ、必要以上に汚れたものとして避けられ、排除され、無きもののように扱われる。その多くは根拠のない偏見に基づくものなのだけれども、それが大多数の意見になれば、一般常識となってしまうのが、この世の中です。

だからこそ、「私たちが憐れんでください」と、イエスに大声で叫んだ十人の男たちが「憐れんでください」という言葉を発したのも理解できます。社会が自分たちに憐れみの思いや言葉をかけるところか、冷たくあしらひ、避けて遠ざける。だからこそ、彼らは少しでも憐れまれたかったのです。

余談ですが、伝統的に、礼拝の最初の部分で「キリエ」という短い賛美をすることがあります。私たちが使用している『讚美歌21』でも、30番から35番までは「キリエ」という項目に基づいた賛美歌が掲載されています。最近では、32番の「キリエ・エレイソン」は、ウクライナ民謡に歌詞を付けた曲ですが、今、戦火のもとにあるウクライナに神が憐れんでくださいますようにと祈りつつ、この1年以上、この曲が世界中のあらゆる場所で歌われたと言われています。

話を戻します。十人の男の叫びを、聖書の原語であるギリシア語は「エレイソン」と書き綴っています。そう、「憐れんでください」とイエスに叫びました。そこに今までは神の愛が届くチャンスがありませんでした。社会が届けようとしなかったからです。だから、今、イエスに届けてほしい。声を張り上げて願った彼らの必死さというものがじんじんと伝わってきます。

それに対して、イエスは十人の男にただひと言答えました。「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」（14節）と彼らに言われたのです。当時、モーセ律法によれば、重い皮膚病が治ったかどうかの判断は、神殿で働く祭司がすることになっていました。もし、祭司が治ったと判断すれば、犠牲の動物をささげて、身体を水で洗い清めて、病が癒された人は、晴れて一般社会に復帰することができたのです。

ですから、イエスが十人の男に、祭司たちのところに行って、体を見せなさいと言われたのは、すでに彼らの皮膚病が癒されるということへの宣言であったと言っても間違いありませんでした。イエスは明らかに、彼らを憐れまれました。誰も男たちを憐れむことがなくても、イエスは憐れまれました。ここに、モーセ律法の与える「本質」というものを、イエスが実践された。まさに、律法の完成者と言われたイエスが、律法を通して人間の命と尊厳を守られるという神の目的を明らかにし、そして、果たされたのでした。だから、聖書は「彼らは、そこへ行く途中で清くされた」（14節）と、その時の状況を説明しています。

そして、十人の男の重い皮膚病は癒されました。ここまでは、イエスが多くの人々の病を癒された物語のひとつとして、私たちが見ることのできるものかもしれません。しかし、物語はこれだけでは終わりませんでした。実は、この後に続くエピソードこそ、「人々によるもうひとつの隔離」を明らかにするものであると言えるのです。そのことに、私たちは注目したいと思います。

十人の男のうちの一人在場します。その男について、聖書はこのように説明しています。「その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。」（15節）「憐れんでください」と張り上げた叫びと同じくらい、いやそれ以上の賛美の歌声が、ひとりの男の口から発せられ、イエスのそばに戻ってきたのです。今度は遠いところからではありませんでした。「イエスの足もとにひれふして」（16節）とあります。距離感の違いというものを、私たちはこれらの言葉から感じ取ることができるのではないのでしょうか。

その男について、聖書は「この人はサマリア人であった」と記しています。実は、このひとりにこそ、もうひとつの隔離物語というものが示されていると言えるのです。なぜならば、サマリア人とは、当時のイエスが生きていたユダヤ教の社会、ユダヤ人の社会からは、忌み嫌われ、避けられていた存在であったからです。

サマリア人とは、イスラエルの都エルサレムのあるユダヤ地方の北側にあるサマリア地方を出自とする人たちのことです。ユダヤ地方とは近くにありながら、サマリア人は「外国人」として、ユダヤ人によって見なされていました。イエスも、サマリア人の男のことを「この外国人」（18節）と表現しています。

サマリア人は、モーセ律法を違った解釈によってそれを守り続けていました。エルサレム神殿ではない、自分

たちの神殿を構えていました。いわゆる、ユダヤ教から派生した「サマリア教」と呼べる宗教を彼らは持っていたのです。だから、生粋のユダヤ人にとっては、「神を神としてあがめていない人々」という風に見えたのかもしれません。それが、後々にわたってサマリア人のことを一段低く見るようなユダヤ人の態度というものがつくりあげられていくことになりました。

皆さんは「善きサマリア人のたとえ」と呼ばれる、ルカによる福音書10章にある物語を思い出されるかもしれません。強盗に襲われて息絶え絶えのユダヤ人を介抱し、助けたのは誰でしょうかというたとえ話ですが、彼を助けたのは、同胞であるユダヤ人ではありませんでした。そうではなく、ユダヤ人にとっては忌み嫌われ、避けられていたサマリア人でした。

確かにユダヤ人とサマリア人は事細かな部分が異なっていました。しかし、同じ神から生まれた兄弟のようなものです。サマリア人も聖書に書かれた父なる神を愛していました。もっと重要なことは、聖書に登場するサマリア人は、神の愛の本質というものを心から理解していました。だから、ユダヤ人だからと言って敵扱いしなかった。ひとりの命と尊厳を守るために働いた。イエスから重い皮膚病が癒されれば、感謝の思いをもって神を大声で賛美し、イエスの足もとにひれふしてその思いを表すことができたのでした。

イエスは、そのサマリア人の思いを喜び、神の与える本質に立つ彼の信仰をほめたたえました。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」(19節)と、彼を社会に遣わされたのでした。このサマリア人は、これまで自分を避けていた社会に向かって、神の愛をもって、神の思いと願いを自分自身の人生で表現することができたに違いありません。たとえ、サマリア人という、ユダヤ人から蔑まれていた存在であってもです。イエスが「行きなさい」と遣わされたのですから、このサマリア人は胸を張って、神の栄光のために生きることができたに違いないのです。

イエスは、この出来事を通して、ある理由から避けられ、はじかれ、脇に追いやられてしまうような人々が、神の愛が与える「本質」によって生かされていくことの幸いと喜びというものを、明らかにされました。それを与えられるのが、救い主イエスであるということです。私たちもまた、このイエスからその本質によって生かされているという現実があることを、決して忘れてはならないのです。

しかし、世の中は、そして信仰者もまた自己批判の思いに立って考えたいのです。私たちは自分の考えや守り続けてきた伝統というものによって、いとも簡単に大切な命を、そして尊厳を自分たちの枠からはじき出そうとしてはいないだろうかということなのです。もちろん、それは「神の与える本質」という視点に立って物事をとらえたときにです。根拠のない、思い込みによって、私たちはそれを宗教の言葉、神の思いと勝手にとらえて、絶対化していないだろうか。そんなことを思われるのです。

この問いが、今日の聖書の言葉に収められた「重い皮膚病を患った十人の男に対する世の中の態度」と、「重い皮膚病を癒された一人のサマリア人に対する世の中の態度」というふたつの視点を通して、ひいては私たちの生き方というものを問わされているような気がしてならないのです。

祈り

私たちの神である主よ、私たちを憐れんでください。

簡単に人を分け隔て、それを避け、排除しようとする私たちの罪を、どうか憐れんでください。

そして、私たちに愛の本質というものを理解する心を、豊かにお与え下さいますようお願いいたします。

救い主、イエス・キリストのお名前によって、感謝してお祈りいたします。

アーメン。